飼籠鳥

十九

特 7
7
71

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71

ガラス使用

特別 特7-71

佐藤成裕著

飼籠鳥

伊藤篤太郎記

巻之九
巻之十

昭和一二年三月三日

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

飼籠鳥駒鶯部目録第九卷

勝成裕曰駒也鶯の類皆囀て自樂む人是ハ樂ミ
ハ故ハ駒ハ奥山ハ頂ハ産して人間ハ
水免ある事なり鶯ハ函山の藪ハ生して一境ハ
ハる事願ハ去これ此鳥を方尺ハ籠中ハ畜ハ
其囀ハ聞もまハ所謂以遊乃樂ミ是ハ及ミ
形ハ

鶯　佐ヽ伊
駒鳥　島駒
大島赤鬚　喉紅
五色雀（南産志）　聲奇雀（典籍便覽）
澤鵐　戴鵐
雪鵐　目大鵐
大瑠璃　小瑠璃
黄羅裙（休寧縣志）　二十二種

飼籠鳥卷之九

駒鶯部　二十二種

鶯（古名）　一名ゼッチ（薩州方言）

古今鶯の字誤れり日久しく了改るべし

鶯は黄鳥の一名形ち故小黄色細もウグヒスと

訓ず誤なり俗又月令廣義に喚起小當り那なり

或は山茶記に報春鳥小當り誤なり陸放翁詩集乃

婆餅鳥と當り那なり舜水淡綺小黄形鳥り

似ると云又享保中長崎小来る因改来る

示す清朝の俗小柴鶯と云なれども信し

加ざる石川丈山は詞葉小鶯り皆誤なり志れ

ども漢土小なり故小杜鵑加なり故此墨中小

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号　特7-71
ガラス使用

卵を生ず他鳥の巣に卵を産る事なし是ハ
因てなれハ杜鵑春なき渡土ハ此鶯なき事形
ハ其名及形状を詳に載るなき故に
加之ハ吊巣て云く白見て愛なつきハ花も枯
酔て愛なつきハ鳥小鶯なく古へ皆なき声成賞
る故小哥人是成郷なき形鶯ハ美彩なれ
ども春早く鳴成以て各国小事成なる今如きハ
稀に此声を習しめて学ハ聴く変なれて各
賞なき是れ古へハ自然と早鳴せ賞るのミ古今
遠ハ久しきて又諸国小なき名所なて貴ハ国名
故の常小して云るに雖も箱根小生る
形も大小並なも低く是高くして其声尤圓滑之

都て雄ハ雌を求しなき雄ハ名鳥出る
所なし其形雀小似て小し鶯背蒼褐色
して腹小白し嘴細く雌の如し是青く細し
黄なき文彩なし常に竹叢の中ハ生て細虫
を食ふなり巣を二月の末なり竹葉を以用
諸国の竹を引て篠竹ハ沢なる高き所なり
初鶯ハ初ッ其卵の色紅し其中雄四ッ以て後
又巣を為なき其卵四五ッ多くハ雌なり初産ハ
陽小して先ッ進む故ハ雄多し次ハ陽大ハ衰小
故ハ雌多して雌多し又初鶯ハ口大小そなの
色黄玉て黄なり長し嘴して声も大ハ高し
次鶯三鶯ハ雨て養ハ事なれ其卵ハ小なし

三五日を限て捕へ飼成拵へて食せしめ飼成て
念成入神に磨り蜘蛛或は茶に附きたる青蝿を
飼ふに離て鳴ざる事なし心ゝぶれば翼日ゝに細山
小なりて長しかれども翼日ゝに大なる拵に飼ふて
加減なく小なる中は水を浴せる事なれ
ども水強くれば果して死る之大抵大小形ありても
先づ水を吹き漸ゝ小なるを浴せしめ飼法如
ゝ鉢に入て六分に成る時に赤子袋を
鳴られば板中能く通利して事の病なし
又蓋も塞る事なし扨又夜飼の仕方様ゝ
なれども夫は如何なる夜六時過き
まても燈燭を照し昼の如くして自日の永くなる

に従ふ鳴て春の来まるなりて声を出る此時に
児飼の者を召て鳴を聞て習ふ〳〵是成附子と云又
引鳴は法華経と鳴さあるをヒイと引を云引鳴
しを只鳴を云事と云三光と云は月日星と鳴く
其外津府若藤なりとよく鳴れども三音の
ものは笛や笛なれて教る功者
なるに成ては能く
鳴上りて何とも種子を変味して継ぎ
飼て強き音の親に附るたしなみ
教る事なれども何程なれども教ひぬるものなり
又籠桶の制も種ゝ好れども板を上手の
匠に拵へしを用ひられば格別よき音の響きなり
京師よりの色ゝ巧に作りたるものあれども都て

かゝを考へ多し古人の詩に花山に依て
よる鳥山林に入る聞けとあれば籠中に置く
事なり小鳴成樂もなし所謂古人の人乃声成
賞るにを

顧清山茶記曰山中有鳥如鴿鴿色蒼毎至正二月
作声云春起也至三四月云春去也或曰報春是れ
蒼鳥の声春起春去と鳴くなり山中の伯勞乃ちきの
声聚り是れより出て年まる鶯と共に又周波系
名付て紫鶯鶯と云まく考る所なり

佐々伊一名サヽキ古名ミソヌスミ奥州ミソクリ仙臺ミソツク下野ミソツ島西國
名物称呼小云く或説小此多溝の色に三歳樓て長き
故小ミソサヽイと名付るをミソサヽイと云ふ此字第ふ小
ミソ小溝之サヽイ小ふ小ふ小くサヽキと云ふ小名乃潜
なるなりサヽキハまくやなる意小き事之三歳を
いつる義小小ふ又鵙と云多小諸乃小高
怖れて飛去る鵙も鷹の屬也と云ふ中小
サヽイハ實て怖れ去却て蜘蛛其外乃蟲を
捕て鵙小與小喜附小抑て食ふ云ふく
是を見ると云事まく此説成聞えぬ古来
よく鶯鶯小當て大ヨ誤を成り貝原氏も此説乃
改る事なし

諸州とも冬小入て人家乃色に来る夏月小
山陰乃冷涼の変を掬む喜形鶯と右同して

かて細小き色薬禍なり常細く足高くその尾
立て高く静かに二三回小声して鳴る声高低
なく高く少々へ高き声乃高きハ形大く
高足も大きく一種大形なり常に是ハ初穀
形へ是撥て高ハ時ハ高鳴く極て高く
高巣ハ四五月小田合の雪塘なるの下或ハ水溝の
邊に穴を掘りて巣を作る江戸ハ多く日光
山乃邊に出来る多月又新雪の元松小次第
なる日乃夕に高声の大なるを聞き網を張り
追捕て捕る真に張籠小入れ静なる変に置き
明朝日の出る前小白餌を作り鶏冠の中小
蕎麦(ハナミ)を二ツ小切りて並べ一日出れハ日小向て

俄に消なる変に出せハ高蕎麦を浴小て逐に同小
附属なる夕に取なるハ同に所き高く又蕎麦
餌小て能く喰ハと能も極寒に出て此蕎麦なるき
ハ諸本の本に出る餌蝦蛛小てよく同法高く
ハ新雪小ても況同て小乃同てよく
餌乃中ハ七分位小加減出て高鳥と
遠ひて高く餌へ易く同餌鶏の高も待為て
餌て思に死出ものなる高雪も代りを入て塗出
高く水を浴して鶏を浄出へ餌の中ハ
同乃新きを喰へ高く弱き高形れるものハ同乃
仕方次第よて久しきに耐ることなる此高ハ久しく
同乃ハ法鳥小於て同へ出る細形

瀧佐伊 一名ヤワラヒ

常陸水府の北に金砂山と云ふ山中の大樹の下或は叢林の中に棲息して ツリ〳〵と鳴て足乃本に来るがごとし 長五寸一歩二歩乃先に立て鳴ふ〳〵声あり 尋かゝるに其形状の佐伊と相同して背は佐伊のごとく黑色あり腹は白く鶯のごとし 鶯の如く細長を尋て啄む五月に出て山中の瀧乃邊に於て巣を作る佐伊の巣に異なる雛を産山人希に飼ふ兒同なれは出て馴て是を飼ふ 毛に入て多くは死せず 飼法佐伊の飼法に同し 他多くは死せず 此山中のみ産すと云へり 予先年此山中に入て是を見る事三度 是を名て

岩佐伊と云

駒鳥 一名マキトリ 本曾古名

其鳴く事駒乃鳴て走るに似たり故に名付開元遺事乃知更雀に當ツ未だ決しかたし 信州木曾大山より出る日光山より多く江戸に出る又雛も持来る 岐蘇山にも出る其他奥州甲子山に産し言師に出る 蔵山より出る或は和州高野に産す 此地方に出るは形大に足太く高く声も高く高く故に駒鳥と称す 本朝食鑑に云く 鶯に似て稍大 頭背蒼赤領頰赤く腹灰黑腹の下白く尾羽共に蒼黑して翼細く尖て春夏の間籠中にて久々啼 和名抄に播乃毒と云 籠中にて久々啼 和名抄に播乃毒と云

と云説西国にのみ多く是鶯に大サ雀の如く首赤く両翼及背赤く褐色尾短く赤し胸灰白に黒点ありて或は灰白にして黒点なきあり腹下白し背黒く尖る足高く高し他鳥の如く巣木に腹なと附て居る事なし常に高て鳴ず二月の比より六月に入て鳴く七月に入て鳴ず秋に成る時は鳴なし八月の終りて又声をあげ是も鶯の如く種々鳴方あり伊勢より大和の辺に鶯に似て其鳴ぶ好む江戸にハ種々鳴方乃善悪をわきまへず長く鳴ぶ又長く是れも児鶯を貴ぶ色を振て鶯を養ふ是れ成長して色を振て尾ぶ長き鳴ぶ乃是れを色振鶯と云雛の中に雄雄を別て

口少し大に足太きハ雄なり尾ぶ生して少し短きハ極て雄なり是れも度々見れハ自ら能く別る

雛の法三分して中ハ四分なる人乃或ハ寒中ハ四分なるもあり乃三分なるハ重きハ却て死なれて色潤ひ三分なれハ是を撰乃捕ふも老くして能く久しく活るなり

天寶遺事曰裴耀卿勤於王事夜看案牘晝決獄訟常養一雀每夜至初更時有聲至五更則急鳴耀卿呼為知更雀　此説に因て知更雀と名なり駒を盛に鳴く時ハ五更の法に一声ハ鳴く事乃ち雄も極て駒と決し難し

雪の先年木曽山中を通る時次郎〜て駒の
事を咎めしりるる此山中はかきりて多く巣成
作り子孫出る子を出る時多くは梢て深山に居る
して山乃中後より下りて梢乃枝に巣を作る此由故
尋るに中腹以下ハ諸鳥多く来て巣成居る人を
たよりとして巣を作るに似うきられても人家を
き変よハ乃る故又雪多く降をたる年ハ一番
少し雪とて儀〜死なとも雪も少し山も浅き去
早き年ハ早く巣分て鳴も早雛も慧なく成長と
山中の寒暖よて其年の豊凶を考るなり故此鳥ハ
一番年乃短き鳥なて雀なとの様に年長に雛を
養ふ事を知る故大抵に児なれハ同もろくまたこ
を作りて児も巣より落る事あり是巣ごとと
て山人取て喜ハ此鳥成長しては強し又雌の児乃
中より取て喜ハ同を学ひに子を振りて鳴せて食せ
付る時ハ左振袖に似ると雖も一番ハ鳥よハし又
前鳥も其年の児を云ふ山中乃水よて一年も
同辺たるハ強し鳴も高く而て分の変乃ことハ
やはり乃ると喜ひ初きたるハ自然とよハ同翼の
先汚もくやくさせて老鳥の形なる為しなな
かちる老鳥ふるハ乃是れも谷川の瀬乃音或
高き変に接せて相乗に鳴き合せて成長したるハ
声高く響も長し駒に初きて二番児より三番
児ハ別して悪し云られ二番児三番児と云ハ

高くなり大抵一番児より雌雄おのれて在り
如く一所にて相親て又児を養育する事なり
扨是等の数年山中に入て其雛を乞て高賣
するものなりまれに高き事なり兎角人里の
水を飲て飼ひたるは山人真心をもつて山ゐよて
時々山蜘蛛を喰て喜ひたるを敵とする大きなる
蜘蛛山の勢を含て居ると人里の煙草を被ると同
籠の内なれども自然と かなりなる毒なり
一所にてなれは早く死れども一通りにては
皆同様なる物なり毒は山中の奥にて上古より
棲み鳥獣や昔の人は真木鳥と云ひ伝へる
事なり此説甚面白し 元古歌に真木と詠るは

今の羅漢松にあらず真木と云は諸木の長を云
諸木の長は檜なり かゝる事なり 古歌に真木
立山と云も檜の能く老へ茂り立つを指し云
今の羅漢松の庭園に植る物は此山中の木は
皆檜なりまるはなり 云られは真木立山と云も
如此乃山を指して云歟 此説尚考へし
真木鳥と云事は山人の云伝へ能く能く考へ
立て高く称せつき事なり此名この山なり
日本の山乃深山より初て富士十二山なりと云の
中にて敵山乃如天下第一なり加何なれは一般
大よりして首と大小足高く太く切あるを指る
なりても敵山既に云ゆる如此日光山は溝山喜

外又奥州南部の佐山より出る駒の子孫
阿多唐四郎仕方高く多し水曽の山人来り
著したる振駒と云小本一冊を國乃産の
上中下の之説話小記を為られとも飼法等方
ゝ仕高く悉しと雖も山中より生れて山中の駒を
取て自ら仕付る故仕方なれか敢て益なし故に
此書も引き用ひ水曽山中通行して駒を
好きて取り求る者に新たに其説を尋ねる
為と意味ありて第弐小述に其一うくしに
あらずしをこに記して好む者に供しものを
市中より阿州島より出て此説を差出さるる者
多し故に大概を記す右乃如し

嶋駒

南方の諸島より大坂の高島家小倉氏を所望
駒小出同しして赤毛乃ち駒の雌と云容子乃
春に出て駒と同付よ鳴く高く駒より似て立て閑静
なり飼法も駒と相同し

赤鬚 薩州 一名琉球駒 大坂

和産なり元来琉球地方の駒なり昔しは琉球より
ても此名を志し以先年薩州乃有司某しから
ひけの名と假名より書き琉球へ遣し求むれハ
琉球よりもからひけの字を引けと讀訛て赤鬚
島と認て来る薩州よりても琉球よりても赤鬚島と
云名なりと覺へたり是れより流来る始て赤鬚

鳥と記すも事を志す遂に其說を以て偽なる
世人まく此方を考へしてき鳥と赤き鬚ハなき
事を疑ふ矣ハ原〻其琉球の地方に產るハ
本鳴と云其形狀全く駒と類して頭より尾まで
四るまて相同〻後ハ亂色にて両傍も黑き此
其声駒と同時に おなを鳴て雛庭籠の中に
庭籠の中に相なと相て巢を作りしむ兒
形して蜘蛛を喰ふ故養鳥家に此の本渡と此
皆庭籠乃兒なる同法駒と相同〻方強き鳥なり

大嶋赤鬚

近來琉球人薩州に載せ來るハ此大嶋乃產之
其形ハ嶋と同〻て首より尾に至るまて駒のごと

赤〻頭乃面顏黑く狗と及て真黑と後の下白
〻背黑駒のごと〻足も駒と相同〻本嶋より
其声高て高〻故と此ハ此大嶋のみ高く鳴
而て本嶋ハ絶て鳴ること稀〻年籠乃如て毎秋
是を求む其價も高く低〻高の羽色最美
なり鶴ハ白諸鳥乃長と云ふ〻同法駒と同〻
と雖も日本の水を飲て毛色大と減ず味も劣
ると雖て彼乃國より來る新多と大と異なり

喉紅 一名ノコマ 江戸 西土

開と東まること形〻豊前の彦山乃山中に產ハ
こと是より言旅乃八幡乃後の山と龍游ず都て
西土の山林と八村と〻て土多の急なも

まるく帝より如は其形狀駒の嘴のごとく狗の
腹乃色はいとゝ赤きゆゑ唯俗に下赤く紅の如く
目の上下に白眉ありて嘴細く黑し大和本草に
云く形蘆原雀に似て俗下赤し故に名付盛京
通志乃拂老婆に當ると云此説未詳陶氏考る
所乃如し文化二年の春養鳥家に来る小駒を
大小して背黑色なり咽乃下紅なるも筋なし弥生
其色大に減ず春中鞘ありて駒と異り同法駒
より強剛にして胸に斑し只炎暑乃中治章乃
不如置て閑を腐めふしてよう
相思鳥 松溪縣志 一名雙七 黄巖縣志
和名サウシテン 和漢通名

昔より唐船時々載せ来る薩州乃屋久嶋にて
喬木乃上にて美声を為ること大に駒のごとく
形鶯乃如し首より背ハ暗黄にして後に黄
色喉下より両目乃色深黄にして頭乃雄乃
先きも黄緑相雜て尾短し二三月より出て
鳴く夏乃間常に啼て圓滑高き間へ上ハ
度々移して雌を如ハ安永の比より多く出て
高く低し今又高價となる凡諸鳥乃中同て
頭乃色赤き物ハ此外より外に一つもなし同法
赤鬚乃如し巣も亦赤鬚のごとくして雌と
形同
杭州府志曰相思赤喙緑色腹下間以黄形小如

麻雀

黄巖縣志曰相思似雀而長緑背黄脇翼俱五色嘴距皆朱豢之者籠一放雖遠必歸此羽族中唱隨之最摯者也一名雙七

松溪縣志曰相思鳥加鴛鴦匹鳥交足而臥背紅毛黄色此説ようなれい鴛鴦を交て臥とゝなり

浦城縣志曰相思鳥□紅毛□紺碧雌雄並翼而宿此説紺碧とゝなれい別種の物を説とゝなり手薩摩より来て常に蒲鳥の事を記録せし琉球の人より隨て琉球の話多し尋ぬる種々に奇異なる事なれ志られども琉球にも此鳥なきよし聞ども此説ようなり

十一月の比より春の彼岸の比小波に来る常に朝思鳥も多く来る二三月より極て高木の上より鳴ようなり是も人家を変にハ関事なし西南の海岸乃大樹の皆より常に鳴ようなり或ハ多く十一月より比より西海の海濱より多く時ハ種々の奇異なる鳥乃山より来て度れて海色の沙より人ハ捕て食ふ来て養ふ変ハ死ハ鳥を食ふ

きぶとゝ同ハ米麥粟稗なと喰ふのこと形ようと云

五色雀南産志一名紅裙漳州府志紅衣娘同上五色鳥陽春縣志

迎客鳥嶺南雜記聲音雀南産志十二紅同

和名上ヒタキ江戸ヒタキ カウ石井藍多方言

古人ようの鶲は家をヒタキとゝ訓とゝ今乃ヒタキ家歟

用て俗用より後に書尾を振アカネ〜と声成也〜て
此鳥故に火焚カ谷なく薩多ヨリ出カツカウ石井と云
諸国とも秋より冬て山中より波来る長月八幡山の
大樹の梢に棲て人見成る事なし〜此鶲成故に
鶲中の最上なる事形状駒鳥に似る尾長く折く
尾を揺す鶲毛赤く首上黒く羽翼の上に白紋あり
大抵五色を備て見事なる大和草に云く大サ
頬白ほど〜頭ハ灰色咽ハ下黒〜背ハ淡黒色
胸腹紅黄色なる翅に白点小なりと云
大抵此説のごとし〜 国法駒鳥のめ〜ハ此〜
漳州府志曰紅裙身緑尾紅一名紅衣娘閩書
南越志曰五色雀五色駁雜如樂宣衣俗呼
聲雀宋紹興間晉集興化郡治榕木之上
或曰即十二紅十二為群中有一紅 是れ五色
駁雜ふ〜て樂人の裘策のごとし〜 ヒヤクヒヤク
の色色成る紅衣娘と云ハ知て云なり 此鶲ハ
ゆ十二種あり云中に紅き物ハ十二ほどと云又
十二種共に群成為〜て云中一紅ハ一雨又鶲の
中乃声能き物ハ黄ヒタキなる十二種乃中の一種
声音雀と云
陽春縣志曰五色鳥形大類鴝鵒十百成群而
色各別内有紅黄二雙凡飛止往来多在於前
而別色者隨之喜食木皮中蟲故木革鳥深山
中時一見之常至也 此説色各別内有紅黄と云

紅ハジヤウヒタキなり黄ハ黄ヒタキなり此二種ハ此数の上品なり
外の鶏ハ皆隨て飛遊ぶ場ハ在於前と云深山中ハ
一見之と雖も常ハ来る鳥なりと云
紅黄の二ツハ人ハ捉て人の先ハ飛ぶ所なり此後ハ
馬鹿ヒタキ瑠璃ヒタキの類なり
嶺南雑記曰五色雀産羅浮者大率先至華
首寺有住容至則此鳥飛鳴迎客名迎客鳥
予先年備中の神代と云一村ハ西ハ此村中ハ鶏
数種あり皆鳴て人を迎ふ似ハ人を送ハ如
中紅黄の二種あり其他ハ多くハ一種ハ五六
色一見ハ村中の人ハ皆尋ねに此多ハ四方皆大山
なり秋ハ西ハ出ぬ人里ハ一村ハ皆此

村中に来る此外の諸鳥も同く来れども一ツ変ハ
所なり諸方へ渡り行く場ハ多きハ見ぬ此
鶏ハ一度来れハ他変へ去ル事ハ
中成鳥一度人ハ慣ぬ害成為ハ場ハ人ハ親ん
て人の前ハ飛く人ハ追ても遠く去る事を
ハ馬鹿ハ馬鹿鳥と云事此所ハ於て始て
所多の疑を発ぬ事を始た所の貴地を
踏ぬハ実境ハ入る為なり況や鶏類の学ハ
是故天下ハ通して偶ハ意舎ぬる事成得る
所なを迎客鳥と呼も為ハ當れ是他の鳥ハ
一度毎ハ声四きなり此鶏ハ一度毎ハ
声を発して飛鳴して迎客と云ハ実ハ

又関々之年日々の高岡に一村に鶏の類多く渡
来る数百羽ばかりなり中に上鶏黄鶏八村くらつて
多く捕ふ云々又長崎に成ると云も此類乃事なり

廣東新語曰羅浮固珍禽之藪也而五色雀尤
異此異々云八嶺南雜記乃説の如し

聲音雀 典籍便覧一名雲韶部同上

和名 キヒタキ

挨囊抄小鶏の字ハヒタキと訓ず字書に音義鳥ノ名と
乃て詳なり駒鶯乃如く攻め加く諸州共に
深林喬木の上に棲む三四月に茂林の中に鳴く
其声高く響て尤も聴に堪たり是乃聲音雀の

名能く當れり其形狀駒に似て尤もいと細く長し
首と背八純黑に右翼十七枚左翼も十七枚翼に
白紋乃唯下に腹に到て黄色なり一色なる時八
淡黄なる黄色乃鳥八一色なる時八都て其色成
減も華花乃黄八幾分種子成蔚て黄花ゆて
他の色に変る事なし黄金の鉛なるごとし
本朝食鑑に云く一種黄火燒乃狀稍小にして
頭黑眉黄に頬頸胸腹に皆黄なり胸後に背小
白乃三四箇乃毛声も亦清滑大和本草に云く
黄鶸乃形八雀同じ大抵此説乃如し其巣多八
形如本乃枝の中に作る巣の巣如し雛を取て

黄ハ去れども二羽ずつして始て黄色の羽翼となる
人多くハ鶯を雌雄として雄ハ雌なるとして雄ハ
清て雌雄なし分ち難し秋月来るも早ければ
強く逃て捕へたるハ久しく飼ひ難し
のめり出る毎の前ハ上ハ七分にて飼ハれハ
果して死ス一羽して後ハ強く又山林ハ
鳴て高く九雑鳥の中ハ此等を上品として
飼ハ也

典籍便覧曰一種形如練鶲毛具五色喙紅足
碧一種略小羽間玄黄足或青或紅又名雲語
部　此説甚ダ詳カ　五色ハ具ハ上鶲なり玄黄ハ
黄ヒタキなり

三結義 臨高縣志 一名
和名ハカヒタキ　茶ヒタキ
諸州共ニ山中ニあり秋ニ至て人倫ニ渡る来る
其形状駒のごとく首ハ背ニ至るまて赤く栗
色なり而きハ上鶲ニ似て脚ハ尾下赤く翼の上ハ
白点ありて鳴声ハヒリ〳〵カチ〳〵と云乃チ上鶲の雌なり
臨高縣志曰三結義一紅一白一緑隨不離土人
呼為火鳥見則必旱不可罹致と云ふ緑ハ此
茶ヒタキなり紅ハ上ヒタキ形ハ鶲なり雪白ハ
あり〳〵まれ也ハ色の分ち多きなり故ニ白
と云此三鳥ハ隨て去来致離ス事なき物なり
故ニ隨不離と云ふ又鳥と云ふ因て必ず旱ス

云のごとく鳴く事一次第折ごとに格よ俗に
次蛣と云或人云く此鳥多く渡来る年は早と云
云大鳥の説と能く符合せる凡土俗乃ち云ハ
和漢相合せる事なり皆己自然より出る格なり

澤鵐（サハヒタキ）　一名

諸州ともに希なる夏月は深山に入て樹に結く
淡色より出り秋月上鵐茶鵐と一同なる事
形状全く上鵐に同じて稀成る時は腹
赤く頭深黑にして上鵐の如も結さるものにて
ザーかのごとき所多の雌は黑なり是も毛を脱
き小頭上淡黑なる是れを飼養家にて鄙ふ
鵐と名て賣る是れ話り初く秋新鳥は破飼に櫚法
の熟したる実を飼ひ上に置き是れを附くへし
又紫珠（ムラサキ）の實を飼の上に置て附るもよし此鵐の
類は多しと雖も此鵐は尤も強し五分ほて飼ふ
是し此鵐も乃ち十二紅の一種なり古人乃詩に
十二紅來鳴と云ハ練鵐乃事にして此の鵐の類
也十二紅に似たり

鮟鵐

諸所ともに深山に棲む秋に入て諸方鵐と同
時に来る春月も三月の比ハ林の中に居る暑に
到て山中に返て多形物も多く榴陽鵐の雌に
多し惣て灰黑にして腹に小鈍の斑点有り
喉下ザーと白く腹に白ザーと物り

雌は雄に似て淡し　是も欲鶏と云まゝ
巣を結ぶ雛の児と云事なり　巣は木の枝
又木の根なゝその上に作る　作る事一切同法五月より九月
迄

深山鶺　一名駒引鳥

賀州の白山に産す　又土人取て大坂の養鳥家に
来る　形状鶺鴒に似て大に首は淡く黒色にして
咽のあたり一白し　背は全く鶺鴒の異為なる事
月明に面白し　人の同じなるに鳴事少し
是も毛翅強て一名一夏をなく時は山中の
似る物なき

雪鶺　一名ヒエヒタキ

諸所共に秋に到て諸の鶺と同時に来る形
状全く鶺鴒に似て首は色淡く白く咽も
鶺鴒の如し　雌は首少し黒色なる事
巣も鶺鴒と同様に作る

同大鶺

諸州共に山林に棲む秋に到て人倫に全く来る
事形状も尤瑠璃鶺に同して色尤も
瑠璃にして濃し　瑠璃鶺より少し大なる
容貌も事同じく大形なる故名付鶺の中
の上奇にて音も高し　腹法黄鶺と同様
同じ色

瑠璃鶲

夏月ハ深山ニ入テ秋ニ人倫ニ来ル事形状ハ茶鶲ニ相同シテ首ヨリ背ニ至ルマテ瑠璃色形ノ咽下灰白ニ腹ハ焦赤ナリ尾短ク性ハ慧敏ニシテ啼モ高ク聞ク度ニ聞法ハ鶯ノ如ク間ニ暑中尤モ強ク毫ノ時ニ多クハ死ス毫ヲ強ケレハ又強シ格ニ久シク間ニ人ナシ時有ハ其ニ鶯ニ似テ尾ノつけきハニ鈍碧色ナリ二年ニシテ碧色ヲ為シ三年ニシテ紫色トナルト或人云フ

大瑠璃

諸州ともに深山ニ棲む尤も奥羽ニ多クあり

奥州ノ甲子山日光山八溝山ナリ雛ヲあけ山中ノ雪消テ取リ間近テ江戸ニあけ四五月ノ比新ニ又雛モ飛来る日光山ノ奥ニ来ルハ一抵大ニシテ高サ三寸ニ尤モ大ナレハ鳥モ大ニ来ルナリ加州ナリの人ノ大形ノ如シ形状駒ニ似テ首ノ上ニ瑠璃ニ背ニ尾ニ至テ瑠璃色ナリ胸黒腹雪白ナリ毫ヲ強ケレハ色ハ色ハ黒ク成ル毫ヲ強ケレハ色ハ黒ク成ル毫ヲ強ケレハ羽毛ヲ生シテ成ル成ルと云背黒ク駒ノ如シ間ハ四分ニシテ寒中及毫ニ入テ五分ニ至リ尾シ寒中多ク死ス又暑中モ六月ニ一暑二冬成ル事ハ久シクたまり物なり事も好テ間ハ

んるに極寒ゆへ凍りて能く死ス

小瑠璃

諸州共に深山に棲むと人倫に交る事なし

山人採て江戸に出ス大瑠璃より帝都に至る形

状大瑠璃に似て少し小さく首より尾に至る迄

瑠璃色なれとも大瑠璃より瑠璃鶺鴒より

色濃し喉の下より腹下に雪白なり咽に変

大瑠璃より大に異なり鬢も大瑠璃に同し正二月

より少し声を出し駒と同時に鳴高し大瑠璃より

閑静なり大瑠璃も閑静なれとも深山幽谷に入たる

容子あり関法大瑠璃より弱し暑寒を六月

弔先年奥州白河侯の命に応して之を封内

甲子山に採藥せしに此山大瑠璃小瑠璃尤も

多し山人是を捕て諸方へ鬻く者あり此者を

平て一夕諸鳥の事故実を知らず此山中に

生れて性格て法多く関に志られとも瑠璃駒比

より価に有る物を書くしるのく物を瑠璃

五七里も深山に入り奥州会津の界に至て多く

此所皆高山にして大樹の茂りたる変に生る瑠璃

独り所つ所にて首大小豆大く顔色黄くして

いろも深山鳥と云るなり之を捕を尋ね此山高

しして者に限りて木に生ずるなり西方に入るの

木に移り共に風に乗て生ずるなり此所又地に

下るに不堪雲山泉所れ高て陽と成るの害

斗ゆゑ地なも居付き久しき事成得ぬ籠の内
なれば変ず成長しなるゆゑ形ハ自と顔色ハ
頭ると云假令ハ海辺の人ハ聲高きゆゑ
潮の音の中まて鳴き聲のなる故形容の高ハ
ゆゑ其内にて鳴と雖も大ハ次第ゆゑ野山中
にて数十年の間捕ても五ツなれ試て
自然と籠を去てなる又中腹として山の中度
にて捕うるハ強ゆゑ久しく活る事なし之
故を考るに春の巣の時分ハ山人ゆゑ巣を日々尋て
大抵ハ取り出ス故ハ又外の所ハ稀に成て
巣を作る故ハ成長ゆゑ雖も多くハ皆二番巣なり
此故ハ山の絶頂ハ世ゆゑ物ハ劣る事此ハ又

希ハ人倫ハ近き事ハ巣成なして成長ゆゑ物ハ
総体ゆゑ雖も能く其ゆゑ首ハ足細く元来も
強く聲も低く此故ハ尋るに人倫をゆゑ変ハ
蜘蛛ゆゑ外の巣に似て食する表類も思のまに
ゆゑ変ハ雪ハ間を百束てゆゑ見の間のゆゑ
形ハ巣ゆゑ出る事も六通り巣ゆゑ出て間多
く成る故ハ骨を折ゆゑ成長ゆゑ故ハ多の形
ゆゑ表ゆゑ僅里の鳥ゆゑ分て見ゆる之間山間ハ
故ハ早く巣を離れて育て自ゆゑ間を尋
形ゆゑに於て鳥ハ形ゆゑ自と異品事ハ多て
ゆゑも深山の籠き多ハ捕わかるき故ハ出る事
少し江戸ゆゑに出るハ皆此後ゆゑ山人の

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

捕ヘて籠中のあるを買ヒ求メ飼ヒ
多ハ死ス也一切細ニ於ては詳ならハ面白萬端
なり山人乃好ミの通り目擧ケる鳥ハ十年餘
間ハ死ス事なし強弱の同利ハ人多く
ある事なしと云故ニ乃チ城作ス

山先達

敵山乃幽谷ニ棲む高く希なり大坂の養鳥家
小ハる事乃チ其形狀全く大猫鳴ニ似て色ハ
淡く黑ケるあり一腹も猫鳴の後ニ似て灰白
ニ背ハ黑く鶏乃如し五月ニ至て聲甚し
高し故ニ山先達乃名乃チ同法大猫鳴ニ相同
尤も暑中高く同ハ小し

黃羅裙 伏寧縣志 一名

和名カウラウン

寛政年中ニ琉球人福州ニ渡て一隻求ム
来る之大サ黃鶏ニ似て之色ハ大猫鳴乃如
腹之ハ白く頸の上ニ毛冠乃如くして常ニ立て孔雀
乃頭乃如し身躰乃容貌ハ全く黃鶏ニ相同
之来渡る中ハ第一乃奇鳥ニ乃チ琉球人
云く度山ニて高く希なる物ニて他國ハ
渡ハつきにあるハ厚く價ヲ求メて求ムる云
同法ハ琉球人雞卵乃清水ニ炒米乃粉ニ和ハ
して乾かなるを之餌ニ与ふ是を水ニ
食ひて水を飲む日和の岩間のめたにハ

粒食乃鳥のゆく所は水を入て飼ふなり籠なるべし
日本乃ゆく所に表飼を以て遂に表飼よりすく四方
小して鴝鵒のこと飼ふ形

飼籠鳥巻之九終

飼籠鳥雀部目録第十巻

勝成裕曰雀の害成為事甚し　數百群
五穀成食ふ綱して取去るべしされハ農家是
為小力を費ス事なく形ス鷹鶻を育ハ
此害成除けハなり費成惜て鷹鶻を育ハ
農家其害小苦しむ佛教殺生成禁するハ此苦
しむを顧ミス古人燕雀と並称して善悪を
分り燕ハ聖鳥なり雀ハ悪鳥なり日成同して論ず
事形れ

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

雀（スヽメ）礼記　黄雀（黄雀ノ）縣志　白雀（白スヽメ）墨客揮犀
赤雀（アカスヽメ）隨　黑雀（クロスヽメ）　柿雀（カキスヽメ）
麻雀（ゴイシスヽメ）本草綱目　鶺鴒（ヒタキ）莊子　檀特（ダンドク）清朝俗名
咬嚙吧雀（ジヤカタラスヽメ）　紅雀（ベニスヽメ）　異類十姉妹（イルイ）
坎伊仁須（ヒヽニス）琉球俗名　碧鳥　猿子（マヽコ）
赤猿子（アカマヽコ）　山猿子（ヤママヽコ）　萩猿子（ヨギリ）
突厥雀（トツケツ）唐書　河原鶺（カハラヒヽ）　黄河原（キカハラ）
黑河原（クロカハラ）　大河原（オホカハラ）　朝鮮河原（ヽカハラ）
河宇須（カハウスカナアリヤ）鳥　加那亜利夜（カナアリヤ）　古哈魯（フハ）中山傳信録
紅鶸（ベニヒハ）　黑鶸（クロヒハ）　雪雞（ユキカヒ）西城聞見録

三十品

飼籠鳥卷之十

雀部（三十種）

雀（スヽメ）礼記　一名瓦雀本草綱目　賓雀同上　小雀本草原始　馬婦鳥王氏兼葭

佳賓（泉州府志）　家賓（大倉州志）　首陽本草滙雀腦一名　嘉賓

番名

和名スヽメ

諸州芸ヨ多ヽ凡番國小も此鳥なき處なし

古歌小スヽメと云ハ竹の事なりスヽメと云ハ生物乃名なり萬葉集なりに四十雀メと云或ハ馬メ或ハ大メと云皆メ似て竹ヨ集る故スヽメと云俗傳ヨ竹ヨ雀と云中ゆうスヽメなる竹の意ハ合こゝろ竹と雀と云併ハ重詩なり和に

一名ナリ

本草綱目曰時珍曰雀短尾鳥也故字从小从隹音錐短尾也栖宿簷尾之間則近階除如賓客然故曰尾雀賓雀又謂之嘉賓也世説の如く尾雀の名尤も尚れり先年備中の神代と云ふ所の山中より始て織を取る人出て居候仙を定む世山高く深く人倫少五里ばかりなる雀二羽人より從て来る座より来る翌春より出て六七羽より多く世変して就く〳〵世説を世に聞き雀を見て始て無雀来賀の説を信ず上古人倫始て出来る時乃ち如此又無を写こんるを云古人実事を記録する後世より出る世説の事なり世一事より

ても古人の虚小あるまる事をしるべし見れば

合山縣志曰山雀黄口小雀一名佳賓大厦成而燕雀来賀 世説見出なり

蔵谷の一士井山氏遠村より出て村長の家より信濃に一日雀来て掌中より出る往てこれを雀が頭小大なる沙乱数十箇付て居る手を以て是を取る去る飛鳴して大小悦び容あり文江戸の某が賓客来る時小手を折て呼ぶ時小鳥来て几上に集る見れば掌を折て食物をとり散して去る用付て別深しむる物形平也高中より出し時冬月食物乏しきに付き物食物度中に散して多く集るなんぞと云く散して遂に几上に能

来る人話見て珍奇とし見れば乃ち竹を以て囲み食
ひまあるまゝ其小巣刈深事形ちて去る事三十日
除旅行して来るまゝ小夫ら捨て来る事なし
又備中の山家ハ燕乃巣の中ハ雀卵を生じ船
燕泥を含み来て巣を作りて大抵ハ出ずたる所雀
来る燕を追ひ所ハ雀ハ燕ハ物事なし交葉
ひく人来て交巣の中ハ入る燕ハ交葉ひき
みゝ交巣ハ入る事なし遂ハ雀小巣ハ燕
雀乃交賀高と巧なる事なり燕の居む家を
知て見ひきる事妙なり此雀ハ夏ハ入て居く
数して集る事なし秋ハ冬ハ集る
小雪の時雀のまゝ小なり
来れども性淫なる物

番国乃人食ハ事なし唐土ハ多くハ淫茶
小用る故なり
本草綱目曰其卵有斑其性最淫是れなり
痘科曰食雀卵者子多淫乃ち見れなり
杭州府志曰雀不能行其行必躍俗呼麻雀
者是 地説のゝ歩行なり二足ハて躍て
行く諸鳥ハ行歩ハ異り古人乃出籠ハ雀躍ハ
云も見なり喜ハ堪へざる時ハ雀躍するゝ
黄雀 黄巖縣志 一名山雀 含山縣志
和名入内雀 大和本草
諸州共ハ深山ハ棲む秋ハ到て人家ハ園圃ハ来る
其形狀雀と相同しく頭面ハ黄色なる声も

[illegible]に似て多く聚て樹梢に集り竹雀の如くして
少しく異る所あり薩州にては年々多く捕て鷹
鶻の用とし雀と同じくして少し若味はひとして大和
本草に云へり昔一茶系の實方の中将源朝臣
東山流を経て京せられしに已に死せり雲化して
雀となりて禁裏の臺盤所に飛来て食物を啄む
是れを因て入内雀の名ありと云或云入内雀
第一雀と雖も尤大雀雖も飛来て出入内雀
飛来れば忽ち飛去て[illegible]
又加賀の[illegible]に此多し
[illegible]
[illegible]

黄鸝縣志曰雀色黄者曰黄雀　此雀之
合山縣志曰山雀黄口小此山雀是れ之
臨海異物志曰南海有黄雀魚常以六月化
為黄雀十月入海為魚則所謂雀化蛤者蓋
此類若家雀則未常変化也　此黄雀是之
杭州府志曰又一種黄雀麥稻熟時飛集田
中多至千百十人捕之以為餐中之美品
此説千百の多きと云時は入内雀なり萬雀なと黄
雀の名あるとも雖も千百の事なり一種の
雀は此入内雀なり先年関東の雀の災ひ千百
羽を為と麥田の中に啄む人皆山歳の祟と
雀鳥に害ありしよ

天工開物曰江南有雀一種飛食麥田數盈千萬
然不廣乃羅害者數十里而止　此説亦當れり
和漢共害鳥相同なる事　如此群集して麥を啄む
者未る所以なるものなき故黄雀莫乃化古と云説
乃此雀実と物化生しるふ似たり書にたつ
事なりして急と翔舞して来る且又毛巣成為
知成ものなり又毛雛乃初成れハ全く化
生とあり深山と巣成為る古人乃黄雀黄花を
含むなるものハ雀乃雛まて日乃色の黄ハる成
云のミ別意形し
本草綱目曰小而黄口者為黄雀　見れり
續齊諧記曰楊寶年九歳時至華陰山北見一
黄雀為鴟梟所搏墜於樹下為螻蟻所困寶
取之以帰置巾箱中唯食黄花百餘日毛羽
成乃飛去其夜有黄衣童子向寶再拜曰我
西王母使者君仁愛救拯寶感成濟以白環四
枚與寶令君子孫潔白位登三事當如此環
矣　是皆雀の雛之
文政六年九月十保深川八幡へ来諸国所容堂の傳
小頭の白き雀乃居うしし成るかしるなる
人かうしし八二之比日より来り居ると云て如所
雀乃雀小して国の方ハ多ハ頭へかけて淡白すう
雀の変生しなる八雀ハ多しと或人ノ云
白雀墨客揮犀

和名ニロスヽメ

諸州共ニ時々常ノ雀ノ中ニ出ル予ノ幼年ノ時一羽ヲ捕ヘテ見ルニ眼赤ク皆云ク先年雨雪白ナルモノ雀乃変シテ白キ鳥ナルカト云今考ルニ老雀ハ乃チ自然ノ変生ナリ又ハ大小ヲ見ルニ異ニ成ルハ変生ニ成ル故ニ白雀ナリ故ニ本朝食鑑ニ云一種白シテ目赤キ者ト云故ナリ白雀ハ古ハ稀ニ瑞鳥ノ物ニ成リ故ニ本草綱目曰有白雀緯書以為瑞應所感百川學海曰雀者小鳥称今雀者尾雀也小為以白類畜之色変白　北流旨術ナリ

墨客揮犀曰白雀出殺未羽時飼養変白北流ニ忠信ヲ以テ変ジ土ノ出ヨハ北類多シ書ク出ル信セハ之ニ信ヲ容ル事ナリ

赤雀 隋書

和名アカスヽメ

諸州共ニ雀ノ雛ノ中ニ希ニ時々先年見ル所ノ常雀ノ紅色ナリ

隋書曰開皇中高平獲赤雀大原獲蒼雀長安獲白雀各一　此年雀ノ変生多キ年ナリ

但シ雀又雀ニ於テ変色アルハ尤モ多キ物ナリ

且又人ノ見易キニ出ル物ナリ

黒雀 一名クロスヽメ

黒雀ノ名ハ漢籍ニハ梁州寿津ニテ

農家より多く飼ふ故に人に馴れて来る事
多し乃チ云人より云て云く沙魚ハ何と云ふ魚と問ハ
云人乃チ云く當春家ゝ新に家を作る事ハ雛地より
高く機ゝ高く苦しむ遂に取て焼麥粉を水に
調て糊に用ひて黐を作る事ハ馬毛を生ぜし事ハ
此雀黐を作る事ハ黑く決して白
白ハ如何に成る事なし世俗も黐に成黑き故
如何成る事なるべし黐に成常のごとく白き必
如何成る事あるべき羽一如ぬきて新に生ずる
羽毛変して生ずるハ如何成る事ハ
儘不生ずるハ変ずる事なし

柿雀 薩州方言

薩州に柿雀と云事ハ柿色に
変ずるに依て柿雀と名ず然
除て黐に成ず色ハ柿色に成
変ずるハ他物に移て変ずる事なり
乙附ハ常に附ず色ハ柿色に成る事なり
麻雀本草綱目 一名
和名 ゴイシヽメ
諸州共に常に多く居る
鬼雀常に雀より高く
好て云乃チ雀の白斑に成食器に
云く白斑乃常に成れなく人て

乾隆時ものと云

本草綱目曰俗呼老而斑者為麻雀此説

老て斑なるものを麻雀と云ハ非なり

非なり固より変して斑なるものハ麻雀の

名なれハ故ハ斑なるを名とする而已

合山縣志曰麻雀尾雀也依墻屋而生多食之

可以扶陽痿而補陰衰　乾つまり雀之

正字通曰簷雀俗呼麻雀

淵鑑類函曰俗呼老而斑者為麻雀小而黄口

者為黄雀

黄縣志曰有黄家麻紅四種　黄ハ黄雀なり郭雀

非麻雀なり郭ハ郭雀なり黄郭麻郭

四種なり白黑紅黄入れて名春雀

練雀ハ雀の種小なり或ハ孔雀詩雀ハ雀の

義なり富士小雀ハ小鳥なり通雀之少なる合

義を取るなり此説も非なり雀ハ鳥の

字と成因り只鳥なり通称なり

本草綱目曰正月以前十月以後宜食之取其

陰陽静定未泄也故卯ハ取第一番者　鶯なり

なるが一番児二番児なるも安孫乃意なり

乃ち本草の言非

鷦鷯莊子一名桃蟲系雅鷦鷯說文蘇雀禽經蒙鳩荀子巧雀方言

女匠方言蔑雀方言巧女同上巧婦同上桃雀同上黄脰雀說文訖蒙鳩事物異名

女工同上工雀同上巧匠花鏡雙飛十物異名相思廣東新語相思仔同上黄豆粒合山縣志

黄頭 平湖縣志 社鼓 八閩通志

番名

和名ナシマツ

享保乃比ゝ海船載来る今ハ専て持来る事
ゝ新ハ来るものハ羽色尤美事ハ黑ク所々
又長崎ハ雄ハ雌を如ハ故ハ雌ハ
国ハ雌を如ハ故ハ雌ハ
大サ蒲眼児乃ゝ首ハ尾ハ専て焦黑之
胸ハ白ク腹ハ白ク蒼ク淡黑乃斑点ハ
背黑ク足青黑尾ハ翅尾ハ雌雄一様ハ分チ難ク
雄ハ少ク勝る事ハ見れハ雄を知ル
春彼岸ハ庭籠ハ入て菓羊を引ク也自

然作巣卵を產ク十五日ハ雌と雄ハ
五ツ或ハ六ツ抱る之一書ハ二番を取る八月彼岸
も亦春ハ仕方乃ゝ雌を如ハ同法ハ梁を
用ひ籠れも少ク強ク故ハ稈を以て用ハ
能く久ク生成

爾雅曰桃蟲鷦其雌曰鳩 此説鶺鴒乃鳩と同名之
説文曰鷦鷯桃蟲也一名鷦鷯俗呼黄脰雀喙
鋭如錐
揚雄方言曰自関而東謂之巧雀或謂之女匠
自関而西謂之黠雀或謂之巧女燕人謂之巧
婦江東謂之桃雀点曰苦呼鳩性拙鷦性巧故
得諸名実ハ巣を作ハ巧ナル乃春秋ハ雛成

如其小鳥之色形

本草綱目曰巧婦小於雀在林藪間為巢窠如小袋又時珍曰鷦鷯處處有之生蒿木之間居藩籬之上狀似黃雀而小灰色有斑聲如吹噓喙如利錐取芧葦毛毳為窠大如雞卵而繫之以麻髮至為精密懸於樹上或一房二房故曰巢林不過一枝每食不過數粒小人畜則教其作戲此說細考之則灰色之小鳥別有斑點如色黑別有斑點似雀之類也斑點之說詳後

指一云一云吹噓之時乃十數春鳥小似雀之時乃千百三五之數春鳥小鳥食之云

合山縣志曰黃豆粒雀之最小者善闌巢於密叢啣紙糊之此說多似

平湖縣志曰巧婦俗呼十姊妹此說多之時巧婦十姊妹小一物之鷦鷯檀特小一種形

檀特清朝俗名

和名ダンヒタ和漢通名

海船十姊妹多一同に載る檀特多名て来れるも仰出るあり毒説まるなり彼の五名或小俗名なるも又色色鷦鷯多此數古人皆鷦鷯と名付し多の背の色小乃チ焦色なる色故以て名付時小此多古十出て鷦鷯多疑ひなし焦も焦色なる奇も焦なり皆俗色の義なり俗色乃色小故は

檀特なる乃千姉れ鶺鴒なる事形状十姉妹と相
同し只頭るゝ小首なる尾と長きまて焼黒鶺鴒
なる雄と白雀乃後のめり首なる狗まて之黒
なる黒と白の斑てハなるとおなしなる成上品
なる

一種雁腹と云ハ事後白きまる乃尾乃後のなる
黒斑なる成云不思議又檀特乃雄と十姉妹と
雌成りて雛を如成上品乃十姉妹と成なる乃数
七種なる後編と詳なる如せなる例法十姉妹と同し

咬嚙吧雀

阿蘭陀人持来なる乃千後の地方乃十姉妹なる
事形状十姉妹と殆なる大と首なる背と尾と長
きて十姉妹乃色と似て淡く柿色なる後ハ面色なる
中と黒き斑点乃なる此類乃中と色殊乃て長く
尾事なる事も尾も長形ハ如同し長も
十姉妹の一種と云なる之時ハ長く帝之例法も
常成乃事法も皆十姉妹と如同し

紅雀

此名漢籍と書くみる事なる先年阿蘭陀人
持来なる事なれも西洋の十姉妹なる事形十姉妹と
似て尤も小なる夏月ハ嘴并ともに黒の毛色の
なる十月時分なる音哥のなる和毛を生成又
夏月と事なる此紅毛文と成なる尾ハ細尾なる
背色なる事に成なる事なれも乃千十姉妹の一種なる例法も

今ハ如同一

異類十姉妹（長崎俗名）一名

先年阿蘭陀人西瑪利珂の地方より渡来す二雙

城長崎一港より一雙ハ東都の高貴より求る一雙ハ

薩州藩より求る事なりしかるに薩州より来る形色殊に

其形を写し事の著き群禽圖譜ハ是殺載し形

狀も十姉妹に似て頗る長大なる尾羽にて長く猿子（こしら）の

尾の如し其鳴も頗る十姉妹に異なり鳴ハ甚だ能く

事なし同法果て十姉妹の如く同じ

此伊仁須（琉球俗名）一名

先年琉球人国中に入て是を求む是殺毋に尋ね

福州の市中殺る人家より殺し薩州へ持

渡る其形狀碧鳥に似て外一大形なるのみ同法十姉妹の

如く同じ色附ハ強て異なるなし

碧鳥（長崎俗名）一名

先年阿蘭陀人持来る形ハ北名長崎にて命と云

漢籍ハ拾て書くみる事なし手柔にして是も亦

異る十姉妹形ハ其大サ十姉妹のごとく小なる

物外ハ紫色なり黑き斑尾ハ細尾にて十姉

妹の類ハ去同一是乃チ金腹の類にして一事

なる物なる其同法も亦粗長にて十姉妹に同

猿子（こしら）一名小猿子

諸鳥苦る秋沼山より渡来る其形狀鶸に似て長く

全身一様褐色にして西色ハ頗る猿の如き形似

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

長尾尤も長く野地多の如し三都より蒼鳥家迄
是は多く鬻く飼法は在るまてより久しく飼ふ
表飼より付て飼ふ

赤猿子 一名大猿子

諸所共に深山に棲む秋に至て里に来る大蒿雀乃
如く形状都て小猿子小して喙乃下より尾の上まて
赤し是は黒猿子と云黒なきは乃チ大猿子なり
飼法は小猿子に如し

山猿子

諸所共に秋来る希薩多摩国に渡りて水蠟樹乃
実を食ふ是は長き形状野地に似て喙白く小
共に同乃下黒く同乃上に白眉乃如き尾短く海尾なり
其声も亦小猿子に似て只特形

莪猿子 一名萩鳥 本朝食鑑

他州より来る是は日光山に有る云形状猿子小して
全く黒く赤き乃如き其背は黄色にて足嘴形
翌年乃春より小黒く形も一度程成て
尾羽共に黒き赤き乃如く嘴色なる其特形小して
高低して蒿雀に似て飼法在るまてより久く
飼小に表飼にて飼ふ表飼小に成ては中小
多く死す事有り本朝食鑑に云萩鳥は鳥
萩叢に棲む故に名付称象に似て頭背紫色
黒斑乃如く眼邊及頬頷黒く頭腹淡黄に紫斑乃如く
翼端并翼斑乃如く羽黒白交る背脚黄其声短く

其味亦不佳　世説大抵相似ゟ出ル　椋鳥ゟ
小ゟ出て猶子鳥ゟ出ル

突厥雀唐書　一名鷄鳩爾雅　冠雉同上　鳴鷄唐書　青鷄莊周　番雀通雅

和名猶子鳥日本記

諸州ゟ秋ゟ入て冬飛て里ゟ出る事月ハ
何れの山中ゟ搖むや深山ゟ放て来ル雀て
ゟ事なり事大サ雀のゟ出ル鳥ゟ背ゟ
上ゟ黑色ゟ成翼中ゟ一筋ゟ白ク
頸上ゟ黑ゟ成ル形ゟ如ク声萩機ゟ如ク
秋捕ヘゟ時ハ籠ゟ入て個ゟ個ハ殺個ハ
て形ゟ個ゟ日本記天武帝七年猶子鳥敬
天自西南飛東北ゟ時人大怪異ゟ云故に

和名抄等ゟ猶子鳥も當ル形ゟ
本草綱目曰藏器曰雀冬北来當有賊下邊人
候之故名

唐書曰高宗時突厥犯塞有鳴鷄群飛入塞
邊人驚曰此鳥一名突厥雀南飛則突厥必
入冠已而果然又藏器曰突厥雀生塞北狀
如雀而身赤　世説小囲て後猶子鳥小當或ハ
云ゟ大和本草元圃小山堂肆考乃花雉小當ル
ゟ非ゟ花雉ハ乃チ菊戴勝ゟ又蘭山本草説
小云ゟ稲雀ゟ猿子ゟ云鳥狀以て見ル當ル見ル藏
器ゟ云ゟ狀如雀ゟ云小ゟ囲て皆ゟ誤ル成ル事ゟ
ゟ云ゟ

河原鶏

法勝寺より四時堂より来る地にて者しハなし　上時分の
地方より渡来るや元と漢土の者なり和名抄に
先年琉球人猶多く来て人家より飼ひたる成高價を
出て求り来る彼の人云ふ是成生産とする所ッ
和名抄中庭鶏なりて雛を出せるの地方のときハ
なし　上年高く多くして農家の害を為す
雄雌紅色にして大サ若ばとく今年赤く黑の
先き深黄よりてみるなり背黄より御も黄之本朝食鑑
小形状を伏くて高く張なり喜菓ハ杉ノ木の
上より枝皮を裂て作る人是を見る時ハ再び来る
形雄雌を取り表ひたるハ結び別深も是を逃ル

小移して雛を取る

黄河原

諸鶏ともに常よりも乃千雀の中ハ
白雀多るゆへ是今年深黄なるハ高く珍し
或ハ頭黄より或ハ背黄なるあり翅より尾より到るまて
黄色なるハ到て少し　初ハ五穀より用より食後害
飼ハ付くへし　雀ハ尤もよし

黑河原

先年仙台より家城の原より来る者多く解
来る中より一雙ハ来れとも黑蒿雀のめを
黑し　若し黑鶏のめき漆黑なれハ形口帯黄
して是捕へんと欲ス也とも漆黑なるハ雄

ん〻る事なり

大河原　一名照河原

佐野共る事よみる事あり其形状先の河原小似て少し大なる為なれ又照河原と云方鉞海の弥彦山の麓に小んる事なり第に此数ハ皆小夷の時分なれ共小方此物も多く捨て〻平〻著書海編よりも此数を集む先年仙士及小海の麓の佐方の生産の圖を取十帖を拵此帖よりも大河原の数多く載られ共上〻漫に辨し難し故に此よりも数を載る路産の上にて海編より抜

朝鮮河原　一名ミマカハラ

北地より来る事なれ共年長時の事対馬小〻佐多浦みる共に同〻此多を尋に答山の地方なるや否哉少し彼の地方にて為て見る事那〻云海大坂の養多郡に宗俗の山にて拾る事なれ共其なを〻にて朝鮮より来なれ共其なを〻に小方の地にハ有る事と見て〻なるを形状常に河原に同して無毒墨有て業拾も多く所〻一種に河原と小別あり河原と同〻紛く詳に有形に所〻を雄雄此多別を極て海編に有

河宇須鳥番名　一名カハラスカナアリヤ　アナカナアリヤ

香石　カナアリヤホーゲル　阿栄

寛政乃始阿蘭陀人持来る彼の人ども天竺乃
加那亜利夜國乃鳥形なるものを乃ち見聞の河原鶏
なるもの彼の人加那亜利夜佐ゝ斗と云草を
以て関ひ来る此時此草を先煎じ法方に依
極て実成熟る此草ハ黍に似ぬ事実ハ粟に
似て細く長し彼地國の粟なりと云人物佐ゝ斗
と云実と云事なり此草此実を植て関ひ来る成熟
時此人物を以て已む事成
ゆえして粟を興ゝ高く成ぬ見られし
遂に此草を植る始なり情ひ合此草日和に
絶えず相此名始て薩州に来る云色ハ河原鶏
乃雌乃ごとし一度迄成熟ゝ高位の鳥に似き
極なり又此雛ハ色黄ゝ淡ゝ黄色孫に至ると
色淡く鶏地子の如く見成鶏地子に似たる
時と色の変ゝたる事を高く見る
加那亜利夜
河宇須此淡小波ハ皆黄なる極黄も亦河
宇須此淡小なる此等も彼方産ハ云色実に
雛黄此ゝ今話ハ小出ハ初て渡来る物と
其色大小ハ形平常に彼地に来ハ
支國此産生なるゝ見色ハ此事
なるハ日なれども鶏産なられハ其色も高く深る
為ゝ年ゝ人の為て制る故に悪ゝ云説も
ハ変ハ云ゝ色ゝ此文字も鶏生れ物小

為飼鳥

一種柿羽と云ハ全く柿色なる又瑇瑁斑ハ黄と黑とまだらなる河宇須と云合黄野地子斑の類年々に多く変して出るなり元来彼国なる波ろハ此二種のみなる事ハ合日本よりも色ハ変しなる物と云ふ雛を取るにハ二歳三歳まての淫なる若鳥成打ちてを取の彼屋ハ此より庭籠へ移し三月中旬より雛を生ス巣黍を移よして藁或ハ藁ハ藁の書汁まて表面ハ焼して指し食しむ自食さるまを取ると巣ともに取上げ又別ハ巣を入て巣手を引しむれハ五六月ハ取ると卵を生ス此の内まれハ

再ハ雛を取る形ハ一度ハ或ハ二度或ハ六度卵を産ミ終へるより十五日或ハ十六日まて雛を孵ス一番ハ十日或ハ十五日或ハ四五年ハ卵を生ス事同し夫ハ落ち多ク性小国て能く卵を生ス千歳小なる雛まて二児を得る人ハ多ハ二度四度此籠まて卵を生ス此籠の角ハ巣筐と云小筐成物り巣巣と云茅根を上の桐綱より引抜て自然と引しむ又鳥ハ羽毛なる事ハ抜て能く引なる始メ庭籠へ移し一たる母ハ雌雄共に高く相争て静なる是を与へ雄ハ雌を追て卵を産ハ雄ハ雌を追教ち為ハ或ハ又河原鶏の児鶏の

嘴小赤色なれども黄色を帯たるもの稀なり又黄色に
沙加ゝる者あれども元来性活潑なるもの稀なり
得て大なる貴鳥波斯と云或ハ又雛小者ハ長岡を
なすゝ多く殺す人ハ深く禁ずるなり
孫事なし若し病あれハ蕃椒の葉を研合せ
或ハ蕃椒を水に浸し飲しむ甚く効あり其外
小なる活く事あり抱又生ハ得るのみなく
てなし深ハ活して見も痛を生ハ打て去る葉藥
薄水芹ハ三品を合て服し
飲水ハ毎朝清水を以入代へ水あしれハ羽
潤なし平つゝを云く其外色色二十年
前の人更ハ見る事ハ得ざるなし死する者多し

なれども人皆眼目を悅しむ是ハ上古に考
るに今なき物多し今ハ数千戦の後中
形物あるや測ること能ハず是を皆て朝暮眼
目を養ひ壽を保ツ此これ乃チ太平の
幸なる故く事なし奇く後編に詳記す

古哈魯 中山傳信錄 一名金雀 俗語

和名マヒハ

俗に鶸の字を用ひ来る事一日久し字書に
考ふに鶸ハ是鳥也と云ふ今ハ分かり
ハ古俗の語に隨て此字を用ゆ故なり
秋月深り来る夏月ハ澄山に入る事ハ傳聞
戸渡山より迄て杉本に上る能登守の此山の

帝小捷ハ形ノ平男ニテ長崎ヨリ
ヲクル年京京人金雀ヲ称ル小鳥ニ成ル
ハ長ク見タルニ乃チ赤鸚形ノ如ク市場ニ
ハ数実ニ和鳥小ニシテ彼ノ国ノ帝ノ形ノ
彼地方ニ十師姉ハ類或ハ恵眉鳥文鳥相思鳥
ハ類高ク多ク皆彼ノ鳥ニシテ我日本ニナシ
ハ赤鸚ノ如キ日本ハ鳥ニシテ彼ノ地方ニ
ナルモノ形ノ変シテ特ナルモノニ
角実ニ然ルヲ云形状若ク似ク高ク小ナル
首ヲ絢黄小皆ハ黒毛ハ雑ル形
本朝食鑑ニ云ク若ク小ニシテ全体黄色頭
背黒ヲ交ル尾羽黒ク頬黄白声清滑ナク
嘴ニ味苦シト云
中山傳信録曰古哈魯金黄毛羽長背浜豆
長尾種出七島 ハ説徐葆光ノ中山ニ云ク
変ノ形状ハ赤鸚形ノ如キ金英ト云又古哈魯
ト云名ハコガラノ毒ノ鸚ニコカラト一同ク
群ル故ニ名ト形状ト成混雑ル事ト
予嘗テ琉球人上川筑登之ニ見ル話ニ
又松岡氏ハ金翅鳥ニ当ル説話ニ
盛京通志ニ曰テ赤鸚ニ如リ金翅鳥ト
別ナシト云金翅鳥ハ別ニ考ヘ可シ海編ニ詳ニ
鸚
秋月鸚ニ一同ニ形ル中ニ帝ニ如ル事ハ

其形質も鳴声も鶯に雌ハ雄に比して色合薄く黄色乃所多し乃チ花に遊ぶ時ハ常に鶯と如し一度怒を発する時ハ常に鶯と異事なし因法寺周辺にて久しく飼ひ養ひ

黒鶯

先年備前乃国山にて捕る乃チ常に鶯に異して黒質なるなり小黒鶯（ウグロ）花に鳴く似て秋鳴る中ハ常に如あるこれも奉右に如し雌ハ黄潤なれハ黄色弥し

雪雞 西域聞見録

和名 ヨカヒハ ユキトリ 北国方言 コノハ

諸別芸に秋深しし里に鳴る雪降るとき鳴く

鶯鳥 本草綱目に風雪に鳴る

一年往年水戸府に来る花を関く十年

已来始て聞く来るとき形質鶯に雌に似同

して白色の所多し常ハ黄色を常に黒し

足白く毛他に交て鶯に似て黄色なきに同

法花経に鶯と同しく移年を経て変化

薩多に成ハ鶯に移年を経て強し江戸

に移年なるして高き白ケて黒しとき風雪の

来るしむる事なし

西域聞見録曰喀什噶爾雪鶏群飛極肥美而

性燥 地流の如し 又大和本草に鶯鶯 四十雀に

似て云ハ高く鳴く形

飼籠鳥巻之十終

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71
ガラス使用

特 7
7
71

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『餌籠鳥』請求記号 特7-71
ガラス使用